

Power of Illness in the Brontë Sisters' Novels: Infection, Desire, and Women's Resistance

尹, 伊萌

<https://hdl.handle.net/2324/7363548>

出版情報 : Kyushu University, 2024, 博士 (文学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



氏 名 : 尹 伊萌

論 文 名 : Power of Illness in the Brontë Sisters' Novels: Infection, Desire, and Women's Resistance

(ブロンテ姉妹の小説における病の力：感染、欲望と女性の抵抗)

区 分 : 課程博士 (甲)

論 文 内 容 の 要 旨

イギリスのヴィクトリア朝の小説家姉妹であるシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë)、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë)、アン・ブロンテ (Anne Brontë) は文壇に多大な影響を与えた。1980年代から1990年代以降、研究者の間に、病に付される隠喩に関心が高まって、身体の問題をめぐる一研究分野が形成されている。それを踏まえつつ、さらにこの研究では、ブロンテ姉妹の小説における病の描写、その文化的な意味とジェンダー的権力関係に注目する。1960年代のフェミニズム運動により、19世紀のイギリスにおける女性の地位と権利に関して、ブロンテ姉妹の女性キャラクターのプロトフェミニスト意識が注目されてきている。多くの批評家が、女性キャラクターがジェンダー的権力関係の被害者として男性権力者に抵抗し、家父長制から逃げる願望を指摘しているが、彼女たちが求める自由が家父長制の中でかなえられるという観点から論じていることは多くない。本論文では、20世紀にフランス哲学者であるミシェル・フーコーが提唱した権力の「戦略的モデル」に基づき、フェミニズムの視点から、ブロンテ姉妹の七つの小説における病やそれに関連する概念、例えば、仮病、隔離、感染、汚染、医師の診断などを分析し、女性にとって病の力がジェンダー的権力関係を逆転させる可能性について考察する。フーコーが示した権力は、単にネガティブなものとしてではなく、抵抗する側と相互に煽り合って対立している。抵抗には、戦略を用いて権力を逆手に取ってポジティブに転覆する可能性もある。また、ブロンテ姉妹は、自らの文学作品に病に関する想像や、病にかかることへの恐怖、そして健康への追求を投影している。

本論文において、「病の力」には二つ意味がある。人々の病や病の破壊力に対する認識は、文化や社会によって影響される。まず、病、例えば伝染病と狂気は、患者に身体的及び精神的な変化をもたらす。患者自身が病に抵抗したり屈服したりする一方で、闘病を見る傍観者も心理的な影響を受ける。それは、病が伝染性の有無にかかわらずもつ、人類に対する支配力である。つまり、肉体や精神に異様な変化を及ぼす病は、そのような病にかかる女性への恐怖の源である。そして、肺結核やヒステリーなどの女性の病は、家父長制社会の抑圧の産物であるものの、

女性はそれらの病の力を用いて、伝統的なジェンダー的役割から逃れられる。ヴィクトリア朝では、身体や精神面において、女性は男性より弱いとみなされ、これが理想的な女性性とされ、19世紀の家父長制社会において女性は「病的な」、あるいは「伝染力を持っている」象徴となった。このようなジェンダー観が、「分離領域」というイデオロギーを正当化し、女性が公共領域で男性と同じような平等な機会を得られない状況があった。しかし、ブロンテ姉妹の小説における、ジェンダー的権力関係の中で、女性キャラクターは病や仮病を利用し、家父長を威嚇し、自己の欲望を満たすことができる。また、女性キャラクターが家父長社会における女性の「病的な役割」を拒否し、家父長的な価値観に抵抗することができる。ヴィクトリア朝の女性の理想像は「家庭の天使」であるが、ブロンテ姉妹の女性キャラクターたちには従順な天使ではなく、自分の身体を操って男性を支配しようとする複雑な内面がある。つまり、ブロンテ姉妹の小説における病と医療行為は、女性の身体・精神が弱いと暗示する消極的な概念だけではなく、抑えられる欲望を表す方式であり、家父長制への抵抗である。

本論文は五章構成である。第一章では、エミリー・ブロンテの『嵐が丘』(*Wuthering Heights*)を考察し、女性の病弱さ(Female invalidism)の観点で、Frances Earnshaw、Catherine EarnshawやIsabella Lintonの象徴的な親子関係を分析し、家父長から権力を奪うために、病や仮病が完璧な戦略であるかどうかを探求する。第二章はシャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』(*Jane Eyre*)における、病にかかった女性や反抗的な女性が受ける隔離が示唆する力の関係に注目する。隔離は、伝染の予防策だけではなく、Janeにとって、外部から身体的・道徳的リスクを避ける手段である。第三章はシャーロット・ブロンテの『シャーリー』(*Shirley*)と『教授』(*The Professor*)における女性が「分離領域」で直面する苦しい状況、特に身体上の変化について考察する。女性キャラクターが縫い物をすることに対する様々な態度に着目し、私的領域における女性の義務と不平等、また女性が公的領域から排除されることが女性の健康に与える影響を再考察する。第四章はシャーロット・ブロンテの『ヴィレット』(*Villette*)の伝染と関係する主題を解明する。伝染病を形成する環境の要因や病への恐怖を分析し、主人公 Lucy Snowe が家父長制社会における女性の「病的な役割」に抵抗することを考察する。第五章はアン・ブロンテの『アグネス・グレイ』(*Agnes Grey*)と『ワイルドフェル・ホールの住人』(*The Tenant of Wildfell Hall*)について、家庭教師や既婚女性として描かれる女性キャラクターたちは、ジェンダー的権力関係において同様に権力を制限する役割を果たすことを論じる。女性が不平等な状況や男性の威嚇に対して、抵抗戦略を用いて男性の権力を制限できるが、家父長制の抑圧は彼女たちの身体的・精神的な変化に見ることができる。